

## 主 論 文 内 容 要 旨

※整理番号	(ふりがな) 氏 名	くろいわ しき 黒岩 志紀
博士論文題目	小児呼吸器疾患における小児看護の現況と評価ツールを使用した効率的な看護モデル構築の模索—Respiratory syncytial virus (RS ウィルス) 感染症病態スコアの可能性と有用性の検証—	
<p><b>1.目的</b> 小児医療におけるチーム医療を推進する上で、看護師の日常的な観察による報告、重症化予測のためのアセスメントは重要である。そのために、共通認識と客観性のある情報共有が必須となる。評価ツール（スコア）を用いることで、患者の状態を複数の医療従事者が把握でき、医療従事者間で差異のない情報共有が可能となる。呼吸器疾患看護の現況、臨床における評価ツールの使用状況を調査し、小児看護の課題を明らかにする。その上で、評価ツール（スコア）を使用した効率的な看護モデルの構築を模索する。</p> <p><b>2.方法</b> 本研究は現況調査と看護モデルの構築のための実験的研究で構成する。 研究1： 呼吸器系疾患罹患小児に対する看護の現況と評価ツール（スコア）使用状況に関するアンケートによる横断的調査 研究2： RS ウィルス感染症病態スコアを試験的に作成し、可能性と有用性について、介入を伴わない前向き観察研究により検証する</p> <p><b>3.結果</b> 呼吸器疾患看護では、客観的数値項目が重要視され、実践看護では酸素投与、薬剤の吸入、鼻汁・痰の吸引が90%以上の施設で実施されていた。酸素投与の開始基準は施設によりばらつきがあった。評価ツール（スコア）による総合的判断を看護アセスメントに活用している施設は17.4%であった。新規作成スコアを実験的に使用した46症例を分析対象とした。RSV病態スコアは、従来有用とされているmPIスコアとほぼ同等に病態と推移を反映していた。さらに同スコアはバイアスによる影響も抑えられ、汎用可能な客観性も確保できていた。また、1日目、3日目、5日目の入院期間延長の予測因子が抽出された。</p> <p><b>4.考察</b> 成人との混合病棟が多く、少子高齢化社会における縮小傾向の小児医療の現況が示された。療養環境や人的環境も含めた構造の変容が望まれ、施設面縮小による患者家族への不利益を回避するために看護の質の向上が期待される。看護師の病態把握のための重要観察項目として客観的数値項目が選択されている一方で、主観が入りやすい項目は低く扱われる傾向がある。看護師の観察項目を客観化する試みとして病態スコアを試験的に作成し検証したところ、既存スコアとほぼ同等に病態推移を反映していると考えられ、客観性の確保による汎用の可能性も示唆された。看護師の観察を客観的データとして病態把握につなげることができる評価ツール（スコア）は有用であることが示された。</p> <p><b>5.結論</b> 少子高齢化社会における縮小傾向の小児医療の現況では療養環境や人的環境も含めた構造の変容、質の高い看護が望まれる。呼吸器疾患看護の現況は、客観的観察項目が重要視される傾向があり、小児の解剖生理学的特徴、疾患の特徴を踏まえた看護援助の共通認識と啓発が必要とされている。看護師の観察を客観的データとして病態把握につなげることができる評価ツール（スコア）は有用であり、効果的なチーム医療にもつながる。今後、質の高いEvidence-based Nursingの推進のために、看護師が使用する評価ツール（スコア）の開発・検討が様々な疾患看護領域で研究され、使用の啓発がなされることで看護の質向上に期待できる。</p>		

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・結論の順に記載すること。(1200字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。